
異世界への迷人

Siba

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界への迷人

【Nコード】

N6614Z

【作者名】

Siba

【あらすじ】

ある日、突然異世界にいた修哉。そこは魔法が発達し、科学が未発達という場所だった。元の世界に戻るため、一緒に異世界へ行ってしまった仲間と共に修哉は行動する。

遠慮なく厳しいことをビシバシと言ってくれてかまいません。よくあるファンタジーものです。

プロローグ

夕暮れで赤く染まる空。

その下に完全武装した兵士複数人と男が2人。

一方の男は悲しみとも余裕ともとれる表情を浮かべ兵士に今にも連行されようとしている。

またもう一方は、兵士に羽交い絞めにされ身動きをとれず、ただ大声で怒鳴っている。

「お前ら！ 康一をどうするつもりだ！？」

心の底から声を絞り出す。

長く続いた『大戦』に終止符を打ったはずの康一。

彼が、仲間だと信じ共に行動してきた友軍に連れて行かれる。

果てしなく続くと思われた戦争。

その戦争を終わらせるため、康一は数人の仲間と共に（その中には俺も含まれる）敵陣深くへ突撃し、敵の大将を討った。

そのはずなのに、連行されていく。

「彼は無形軍の大将に止めをささず、封印を施し、いずれ復活させようとした疑いがかけられている。」

康一を連れて行こうとしている兵士の1人が無機質な声で言った。

そんなわけではない。俺の目の前で無形軍の大将を討ったのは、紛れもない康一だ。

自軍からも死者が大量に出た、あの乱戦のなかで、康一には封印を施す必要も、理由も、余裕もない。

そもそもそんな第一級戦犯者のようなことをしたら死罪は免れない。

「康一はそんなこと絶対にしていない。俺はずっと共に行動して

いたが、そんなそぶりは無かった。」

もう何度目かわからない反論。

「それが本当かどうかは私達が調べることに。」
「ずっとこのような調子だ。さっきから反論は全て一蹴されている。」

「待つていてくれ。すぐ戻ってくる。」

康一がつぶやくのが耳に入った。

「待つ？ 何をだ？ 康一……。お前が死ぬのを、か？

お前もあいつと同じでこんなところで死ぬのかよ。」

「そうじゃない。俺が無罪放免となるのを、だよ。」

まだ死ぬと決まったわけじゃない。それなら俺はあいつとの友情に賭ける。」

それは危険すぎる賭けだ。第一に国家権力を友情で曲げることはできないだろう。

第二に……

「俺らをこんな目に合わせたのはあいつだぞ。それなのに……。あいつとの友情にかけるのか？」

「ああ。俺は信じている。」

その声からははつきりと決意が感じられる。

「待つて……。いるからな。元の世界に帰れる日を。」

「心待ちにしてな。」

会話はこれで終わった。いや終わらされた。

康一が兵士に連れて行かれたのだ。

もう後は信じるしか無い。

康一が戻ってくるように。また笑い会える日が来ると。

狂ったように俺は祈り続けた。賭けの勝率が低すぎる。俺はすでに1人失っているのだ。

これ以上何かを失おうものなら、頭がおかしくなるかもしれない。

「頼むから、生きて帰ってきてくれ……。」

小さな呟きを幾度、漏らしたことが。

言っただけ願いがかなうなら……と幾度、願ったことが。

数日後。

城下に配られた新聞。

そこには、大戦終結の4文字と、
……戦犯処刑の4文字。

望みは砕かれた。

俺にはなにが残っているんだ？

あいつを死なせ、今また康一を失った。

誰が原因……？

誰のせい……？

誰が悪い……？

……あいつだ。

俺はあいつを絶対に許さない。

俺は絶対に復讐を成す。

そのためにこの手が人間の血で汚れても……。

異世界転移

一面の緑。

「空が見える……。」

地面に仰向けに倒れ、空を見上げている自分がいた。

つい先ほどまで俺（真島修哉）は白い壁で囲まれた教室で退屈な授業を受けつつ、窓外の桜を見ていた。

桜前線が5月頃通過する北海道は、5月病でやる気のない時期と同時期のため、授業中、桜を見て暇をつぶすことができる。

それが一変、今は森の中にいる。

何故か？そんなことはわからない。

わかっているのは、自分が今、どこにいるのかわからないということだけ。

目を覚ましたらここにいた。

もしかしたら夢か……？

もしそうだとしたら異様にリアルな夢だ。

夢って靄がかかって細部まではわからないものだと思っていた……。

木々のざわめき。鳥と虫の鳴き声。視界の中心が空。その周りに一面の木々。前に家族で、キャンプに出かけた時に見たような光景。ただ、キャンプ場と違い、人のざわつきは聞こえない。

それに北海道の風の肌寒さと違い、この森に吹く風はとても温かい。気持ちいい。

やばい。眠ってしまおう。

でも睡魔に身を任せ寝ている内にこの夢が覚めるかもしれない。でも夢の中で寝るってどういうことだ？

しばし悩んだ後、

それはそれでいいだろう。という結論に達し眠ることに決定。空を見ていた目を閉じ、睡魔に身を任せて・・・

眠ろうとした時、

「起つきろー！ー！」

声と共に鳩尾にゴスツツという衝撃。腹部がシェイクされる。

脊髄反射で手が腹部を覆う。食後だったら一体どうなっていたことやら・・・。

「って殺す気かつ！」

体を飛び起こし衝撃の主を睨む。

その姿を見たたとんに、俺は・・・
・・・不覚にも見とれてしまった。

「いいじゃない。人間、それくらいじゃ死なないわよ。」

声の主は、女性だった。いや少女というほうが正しいかもしれない。
い。

満面の笑みでこっちを見ている。

年は俺と同じくらいか。俺と同じ制服をきている。背は女子としては平均で。絵に描かれているかのように整った顔。肩より若干長い金色に輝く髪。世の中の汚れを全く知らないと言わんばかりに輝いている瞳。肌は雪のように白く艶があり、ところどころピンクに色付いている。

正直、とてもかわいい。

そして・・・腕を僕の腹の上に突き立てていたらしい。

「……とうとう俺は、『森で美少女に会う。しかも2人きり。』というびっくりイベントを体験してしまったのか。直後、それが夢であることに気付き、一気に嬉しさが萎む。しかし今は、そんなこと考えていられる場合ではない。首を振り煩惱を追い払う。」

「死ななくても相当痛いんだよ！」

煩惱消滅と共に鳩尾の痛みが戻ってくる。

正直かなり痛い。

ん？ 何かがおかしい。少し考えてみよう。

これは夢のはずだ。

ならなぜ……なぜ腹部への衝撃と痛みが……？

そこから導き出せる結論。

「夢じゃないのか……？」

「なに言ってるの？ 痛いのに夢じゃないってどんな思考回路してるのよ。」

金髪美少女が罵倒してくる。

「いったいこいつ何なんだ。名前も知らない女に鳩尾殴られたのなんて初めてだぞ。」

「あの、すみません。出会って早々、倒れている他人の鳩尾を殴ったあなたは誰ですか？」

嫌味たっぷりで尋ねる。

「え？ あたしは綾よ。まさか知らなかった？ ついでにあんたの名前は？」

嫌味効果なし……。

それにしても綾ってどっかで聞いたことあるような気が……？
！ 確かクラスのやつが言っていたな。

清水綾……成績優秀、温厚、優しい、かわいい……つまりパーフェクト。

絶対違うな。名前が同じでかわいいところしか一致しねえ。

いや、成績は知らないけど……

そんな別人のことは置いておいて何でこいつの『名前を知っているか』に『まさか』がつくのか、とか、俺の名前はついでかよ、とか言いたいことは沢山あるが名前を聞いた以上こっちも名のらなければならぬ。

「俺は真島修哉だ。ついでにお前のことは知らない。」

「はあ？ あたしの名前知らないなんて状況分析できないんじゃないの？」

出会って5分。険悪な関係の完成。

「俺が知ってるの綾って人間は、クラスの人間が話していた優しいとか温厚とかがつくような人だけだ。決して出会って早々鳩尾を殴ってくるやつじゃない。」

「あ、それぞれ。それがあたし。」

「はい？」

返しが想定外すぎる。

え？何？この人が例の完璧人間？

「学校って一度変な噂流れたら止まらないじゃない。だからそういうふりをしてたのよ。優しい、温厚、とかね。」

「じゃあ、今は？」

「猫かぶっていません。」

あ、なんか俺、人間不信になるかも。今まで顔は見たことないけど同じ学年に性格最高、姿も最高という人間がいると思ってたのに・

・・・

それが一転。

天は二物を与えず、か・・・。そのとおりじゃないか。

「どうしたの？何か魂の抜けた顔になっているわよ。」

「ちよつと人間不信になりそうだな。」

「なんで!？」

「とりあえず、俺らがどんな状況にいるか整理してみよう。

清水・・・でいいのか？」

ここはどこだかわかるか？」

地面に折れた枝で絵を書いている清水に尋ねてみると・・・

「知らない。」

即答。

「なぜ、俺らがここにいいのかわかるか？」

「知らない。」

即答。

「時計はあるか？ 時間は？」

「知らない。」

即答。

「好きな食べ物は何？」

「知らない。」

即答・・・。

「って清水！ 俺の話聞いてないだろ！」

自分もわからないことを他人に聞くのもどうかと思うが・・・。

「知らない。」

「音声再生機か！」

「うわっ びつくりした。なによいきなり。」

やっと別の反応をしてくれた。

「いや、なによ、は俺のせりふだと思うんだが。話聞いてたか？」

「ええ。聞いてたわよ。」

「どんな話してた？」

「えーっと、あれよ。地底人がいるかどうかって話。」

「全然ちげえよ！」

やばい、この見知らぬ土地でこいつと2人きりって異様なほど不安だ。

「頼む、学校の時みたいに猫かぶっててくれないか？」

まさかこんな願いを他人に言うとは思ってなかった。

むしろそっちのほうと一緒にいて安心できる。

「めんどくさい。疲れる。だるい。嫌だ。ことわ・・・」

「わかった。もういい。」

永遠に続きそうな断り文句を切り上げる。

その後また暫く話し、（案の定全然進まなかった。）認めたくないまとめを言ってみる

「つまり、俺らはなぜここにいるか全くわからない。

なぜきたのかもわからない。

ここがどこかもわからない。でいいか？」

「何にもわかってないじゃない。」

全く持ってそのとおり。

「反論が見つかりません。」

「よろしい。」

会話が進まない。

「なぜ、清水はえらそうなんだ？」

「なんとなく。」

疲れた。こいつと会話をするのは本当に疲れる。

顔とスタイルはいいのに・・・もったいない。

まじまじと顔を見ると、

「なにこつちをじろじろ見てるのよ。気持ち悪い。」

全くだ。

「いや、なんでもない。」

「言わなきゃ痛い目見るわよ。」

言っても痛い目見るんだらう。どうしようか。

「あ、見てみてー。こんなところに手ごろな木の枝が・・・。」

長さ50?程の木の枝。

清水はそれを拾い右手で持ち、自分の左手のひらに打ちつけている。打ち心地を確かめているのだろうか？

パシッ、パシッ、乾燥している木からいい音が聞こえる。

怖い・・・。この上なく怖い・・・。

よし、ここで一つ考えてみよう。

選択肢は2つ。

1つ、言わない。木の枝の餌食。

2つ、「顔とスタイルはいいのにもつたいたいと思っていました。」と正直に言う。木の枝の餌食。

穏便にすませる方法が見当たらない！

というより、どの選択肢でも変わらないのかよ。なら、ここはだめもとで2つ目の選択肢だ。

「顔とスタイルはいいのに性格が悪いからもつたいたいと思っ
ていました！」

「そこに座れ。」

失敗だ。余計に怒らせてしまった。

「すいませんでした。」

正座の状態から手をつき、地面まで頭を下げる。土下座だ。

この際、プライドよりも命のほうが大事である。神様、俺をお助けください。

数秒後、頭を上げるとそこには・・・

木を手で持ち、その手を振り上げている清水がいた。

その手が

俺の頭にせまってくる・・・。

俺は咄嗟に横に転がった。

すると、さつきまで俺がいた地面を木の枝が通過してえぐれる。

木は折れていない。

いつもなら頑丈な木だ。と褒めていたかもしれないが、状況が状況。そんな暇は無い。

俺は起き上がり、
全力で、
逃げた。

一体どれだけ森の中を逃げただろうか。
ずっと帰宅部だったため体力はあるとはいえない。
でも女子に負けることは無いだろうと思っていた。
今日までは。

足の限界。走るのをやめる。
ずっと制服だったため全身あせただ。息もあがっている。
「疲れた……。さすがのあいつもここまで追ってこないだろう。」

その場に座り込み、息が整うのを待つ。
しまった。どう走ったかわからない。
落ち着くことでやっと気付いた事実。

冷静になって考えてみるとここでの唯一の話し相手であるはずの清水とも別れた。
これは精神的にも結構やばいんじゃないか。という考えが浮かぶ。
うーん。これが大切な物は失ってからその大切さに気付くというやつか。

大切な物 話し相手・人間だ。そう考えていると無性に会いたくなってくる。
その時、

「あんた最低ね。こんな森の中に女の子を置いて1人逃げるなんて」
「俺が走ってきた方向から清水が現れた。
右手の枝は健在。目から怒りが感じられる。
前言撤回。会いたくなかった。」

そもそも逃げる原因を作ったのはお前じゃないか。という反論はおいといて、

「どうやって追いついてきたんだ・・・？」

「は？普通に走ってただけど。」

「普通って、俺、男子でもうすでに疲れているんだが。」

「体力ないわねー。私はまだまだ全然平気よ。」

俺、全然平気じゃありません。

。それどころか体力女子以下って結構ショック受けてるんだけど・・・
。そういえば成績優秀ってことは体育もできることになるのか。

「いけない。忘れるとこだったわ。あんたさっきのこと忘れてない
でしょうね。」

俺は覚えているが、清水には忘れておいてほしかった。

「イエナンノコトダカサツパリ。」

「覚えているわよね。」

やばい。笑ってる。この人笑ってるよ。笑っているのに怖いよ。

「覚えて・・・ま・・・す・・・。」

脅迫に敗北。学校での顔は一体なんなんだ。

「よろしい。じゃあ覚悟してね。」

もう抵抗しても無駄だろう。それどころか体力はむこうのほうが上。

どう考えても俺に勝ちめは無い。
一体どうしてこうなったんだ？
俺は授業を受けていただけなのに。
数分前まではまったく知らなかった美少女に枝で殴られようとして
いる。

清水が枝を振り上げる。本日2回目だ。

ヒュンという音と共に振り下ろされる枝。それが俺の頭に当たる。
バキツという木の折れる音と、爆発音が俺の頭の中に響く。

「は？ 爆発？」

殴られた痛みよりもそっちのほうに気になる。

「いつてみましょう。」

清水が折れた枝を捨て呟く。

「爆発音のした方向にか？」

「ええ。工事とかなら人がいるはず。まずはその人に聞いてみま
しょう。」

「お前にしては正論じゃないか。」

「それはあたしに対する悪口ととっていい？」

「だめです。」

会話はこれで途切れ、俺ら2人は歩く。

爆発音のした方向へと。

異世界の理

爆発音の方へ走る。

工事でもしていてくれるとありがたかった。この際、爆破実験でもいい。

修哉と綾がその場所に到着したとき、信じられないことが起こっていた。

そこにいたのは武装した軍隊。歩兵、弓兵、種類は様々。それと・・・。

「なに・・・あ・・・れ・・・？」

綾が正面から見て左にいる軍隊と別の方向をさす。どうやら俺とは別のほうを見ていたらしい。その指の先にあったものは・・・。

人型とっていいのだろうか。全ての固体の身長は2m前後。全身がナスのように黒っぽい紫をしている。そして全身に、まるで、血管のように青い線が張り巡らされている。異様なのは色だけではない。遠目でもわかる。基礎は人型なのだろう。だが体のあちこちから、何か棘のようなものが突き出している。バラの棘のような形。しかし大きくて、禍々しい。肩の物もあれば、足、額、首、いたるところから棘が出ている。またそれらの棘も黒く、青い筋で彩られている。

一目でわかった。

「ここ地球じゃないじゃん……。」

少なくとも俺の住んでいた地球にこのような生物はいない。

いたとしても軍隊が出動しているくらいだ。そこまでの危険生物がいたら嫌でも耳に入ってくる。

軍隊と謎の生物。2者が目の前で戦闘を繰り広げている。

人は剣、槍、弓といった道具で戦っているが、謎の生物は違った。

彼らは軍隊の人間を踏み潰し、引き裂き、噛み砕いていた。

赤い噴水がいたるところで鮮血を吹き、それはここからでもわかる。それともう一つ、青い噴水も水を噴いていた。

「ここは地球じゃないの……？」

「わからない。」

わかるわけがない。

何？異世界へワープ？そんなことができないことなど、小学校ですでに知っている。

しかし、現に俺らは地球では無いところにいる。

それは紛れもない事実。痛みを伴うため、決して夢では無い。

「ははっ。なんだよこれ。ビックリならもう成功だ……。」

あまりに頭が混乱して的外れな台詞しか出てこない。

さっきまでの俺たちは日本かどうかはわからないにしろ、地球にいると思っていた。

なのに……目の前の現実。それが俺らの推測全てを否定していた。

「あなた達、ここで何をしているんですか？」

呆然としていた俺らに、押し殺された声がかげられる。

「聞いていますか？危険ですよ。」
「そこまで言われてはつと我に返る。」

振り返るとそこには人が一人立っていた。

性別は女性。身長は小柄で135？前後。また幼さの残ったかわいい顔立ち。真紅の髪を後ろでまとめ、ポニーテイルにしている。夕暮時の太陽のような瞳をもち、色は日本人に似て肌色。服はRPGでみたような赤いローブを纏っている。手には彼女の身長を超えるほどの長い棒の先端に赤い宝石を加工したと思われる珠玉を冠した杖を持っていた。

ようするに全身赤の幼女がいた。清水と同等の可愛さだ。
この子は暴力キャラには到底見えない。

「きみー、こんなところにいたら危ないよー。」
横で清水が猫なで声で話している。
おいなんだその声。なんだその台詞。さっきまでの混乱も感じられない。

『おい、清水、初対面の人に対してちょっとなれなれしくないか？』
『いいのよ、かわいい子だから。』
基準がわからん。

なぜかわいくなれなれしくなるんだ。

まあ、清水の考えがわからないのは、前の会話で立証済みだ。わざ

わざわざこむ必要もないだろう。

「おかしなことをいいますね。危ないのはあなた達のほうですよ。」「
幼女が首をかしげて言う。

「どういうことだ？」

「説明している暇はありません。すこし伏せていてくれませんか？」
とりあえずこの世界のことはこの世界の人に任せようと思い、俺は
横にいる清水を説得。

むこうはむこうで『なんで伏せなきゃいけないのよ。』とか言っ
てきたがまあ、説得できたので気にしないでおく。

俺らが伏せたのを確認した幼女は、目を閉じ、

歌った。

それは、とても綺麗な歌声だった。

またその声は発せられると共に風に溶け歌詞がよく聞こえない。
ずっと聞いていたら眠ってしまいそんなそんな歌声だった。

どれくらい聞いていたのだろうか。時がたつのも忘れ、聞き入っ
ていたらしい。

彼女は歌い終わり、目を開けた。

そして謎の生物の方向を向き、杖を振る。

瞬間、謎の生物のいた中央付近の地面が、爆発した。

黒い固体が空中を舞う。

「……………」
「……………」

謎の生物が空中に飛ぶと共に、俺と清水が動けないでいる。

爆発音の正体はこんなにも理解不能なものだったのか。

「爆発音……。何をしたんだ？」

「火属性の高位魔法を使用しただけです。」

もうわけがわからない。

え？

魔法？

属性？

はたから見てると杖振って爆弾を爆発させたようなものなのに。

「そもそも魔法ってなんなんだ？」

「ええ！？魔法を知らないなんてどこの田舎物者ですか？」

そこまで驚くことなのだろうか。

「はたから見てると、爆弾を爆発させたように見えるんだが。」

「爆弾？」

話がかみ合っていない。

爆弾のことくらい小学校低学年。いやもっと前くらいから知ってそうなものなのに。

「まあ、爆弾はおいといて、やっぱり魔法ってあれか？空飛んだり、瞬間移動したり。するやつ？」

「そんな便利な魔法があったらいいんですけどね。」

残念ながら魔法は回復と攻撃の2種しかありません。まだ補助魔法は無理なんです。

唯一持ち上げるといふことはできませんが。」

そうなのか。魔法ってそこまで便利ってわけでもないんだな。

いや、相当便利か。あんなわけもわからない生き物と戦ってるくらいだし。

ふと横に目をやると清水がいまだにフリーズしている。肩を叩いて現実世界に呼び戻す。その途端、さっきの俺と同じ質問を幼女に対して聞いていた。

「2人ともここは危ないですから、本陣へ来ませんか？」

「本陣って・・・あの軍隊の大将がいるところか？」

「ええ、この場合大将ではなく国王様が直々に指揮をとっていますけどね。」

国王自ら出陣って謎の生物はどれだけ強いんだよ・・・。

「いこ。あんたも来るわよね？」

「ここに残っても流れ弾で死ぬか、あの謎の生物に殺されるかしそっうだしな。行くよ。」

あ、そういうえば大切なことを聞き忘れていた。

「名前はなんていうんだ？俺は真島修哉、こっちは清水綾だ。」

幼女に尋ねる

「私の名前は、フロトと申します。フロト・アヴェラス。」

フロトつとよし覚え・・・

「よく間違われますが、私は今年で16歳です。では案内いたします。」

「「え？」」

「リピートプリーズ。」

なんか今とんでもないことを言ってたような・・・。

「案内いたします。」

「もう少し前。」

「16歳です。」

「本当に？」

「皆さん、そういいいます。私は16歳に見えないって・・・。」

この身長と見た目で16歳？
半分くらいかと思っていた。

それよりも俺らと同じ年ってところに一番驚く。

「ごめんな。もう少し幼いと思ってたんだ。」

泣きそうなのでフォローをいれるが、言うてから気付く。

これ逆効果なんじゃね？

「そうですね。グスツ、どうせ私は小さいですよ。」
本格的に泣き出してしまった。

横で清水が「あんたさいてー」という顔でこっちを見ている。

『悪かった。本当に悪かった。』と何度言っても涙は止まってくれない。

それにしてもないてる時可愛かったよな！。

俺の中のSが目覚めてしまつかも。

フロトに案内をしてもらい、本陣へ向かう途中、俺らはいろいろなことをフロトに尋ね、覚えた。

まずこの世界だが、サンテリウスというらしい。

見つかっている大陸はここだけ。というより海をわたる技術がないそうだ。

よってここはサンテリウス大陸とよばれている。

身分を持つのはほんの一握りの人間だけで、他は全員平民。

次に魔法についてだが・・・聞いたところ、

才能のある人間にしか使えない。才能には魔法そのものの才能という概念はなく、各属性への適正は個人で異なるという。雷は使えるのに、炎は全く使えない。そういったものだ。

また魔法には精神力（＝生命力）を多量に要し、使いすぎるとしに至ることもある。威力は高いがリスクも高い、諸刃の剣だ。

また精神力は時間経過と共に回復する。

魔法＝技術であるため魔法を使える人間にはさまざまな権限が与えられているという。

攻撃魔法は、自然に存在するあらゆるエネルギーを力に変換させているらしい。

回復魔法は傷を瞬時に癒すのではなく、長い時間をかけて徐々に傷を癒していくものである。しかし魔法に必要な精神力の問題もあり、最近では薬を使うこともあるとか。

科学は全く発達していなく、そのため移動手段も限られる。

重い荷物は魔法使いが何日もかけて運ぶらしい。

魔法に詠唱はいらない。集中するために歌う程度。

以上が知ることのできたことである。

いろいろあったが案内をしてもらい本陣に到着。

「でっけー。」

石を積み上げて作った壁の内側に、これまた石で作られた城。豪華さは全く感じられないが、守りには適していそうだ。ずっとテントのようなものが並んでいるところと考えていた俺は馬鹿だ。と痛感する。

最深部の部屋に到着。

「ここで少し待っていてください。」

「ああ。」

軽い返事。

「呼んだら入ってきてください。」

と忠告をしてフロトはドアの中に入ってしまった。

「なあ、清水。」

「何？」

「俺ら、どうなると思う。」

「知らない。」

「だよなあ。わかるわけない。情報が少なすぎる。」

そもそもこの地の世界観もいまだにわからない。

わかっているのは魔法の使用が可能なことと、謎の生物の存在。それに関連して軍隊の存在。

情報ととっていいのかわからないが

フロトという少女。

「地球にもどれるのか。」

今まで心の中で思っていたことを口に出してみる。

「……………」

清水はうつむいて何も喋らない。

人生、どこでどういつぶりに転ぶかわからない。
ふとその言葉が脳裏をよぎる。

地球の・・・日本にいるうちは少なくとも安全だった。
目の前で戦争を見た今となってはどうだ。しかも謎の生物までいる。
この先、安全の保証は一切ない。

俺らはなぜ、この世界にいたか。
それすらわからない。

ただこの先が不安で、不安でたまらなかった。

「入ってきてください。」

ドアが開きフロートの声が会話のない廊下に響く。

それが全てのスタート地点。
物語のスタート地点。

形持たぬ者

「入ってきてください。」
フロトに呼ばれその部屋に入ると、見たことも無いような光景が広がっていた。

壁は外から見たものと同じ色の石で作られている。

ドアの入り口から一番遠くの椅子にまで届くほど長い絨毯。その下に明かりを反射して光るまで磨き上げられた床。

その絨毯の両脇に鏡、ローブ、俺らでも着るような布服をきた人間が、縦一列にブラツと並んでいる。その人達の目が俺らを捕らえて離さない。

中学校の卒業式なんかよりはるかに沢山の目がこちらを見ている。言葉が発つせられないことが、より一層、迫力に磨きをかけている。何か怪しいことをしようものならすぐ殺されそうだ。

「国王様、この者達がさきほど説明した者でございます。」
フロトはその視線を一切気にせず、一番奥に座っている男の前に行き、片足の膝をつき手を胸の前で合わせた。

「きみらが……。」
フロトが国王と呼んだ男が（いや実際国王なんだろうが、）立ち上がり、こちらを見てくる。
髪の色が茶色。いや、少し白い。顔にも、しわがある。けっこう年をとっているようだ。

『王の御前です。無礼、無きよう。』
フロトが呟く。

これは俺らに言っているのだろう。

現に俺らは王の前で、礼儀も何も無くただ突っ立っていただけだから。

『フロトと同じような姿勢になつて。』

『はあ？なんであたしがそんなこと……』

『この場所で一番偉い人だろ。』

『それは、まあそうだけど……』

『いいよ。やりたくないなら』

清水と小声で短い会話をしてから俺はフロトを真似る。

『ああ、もうやればいいんでしょ！』

納得したのだろうか。それとも俺とフロトがそうしているから、やらざるを得なくなったのか。

どちらにせよ、突っ立ったままではないのでよしとしよう。

ほんの少しの間の沈黙。

最初に口を開いたのは国王だった。

「まず一つ。きみらに言いたい。……すまなかつた。」

え？

なんで王様が謝ってるの？

俺と清水はなんかやられたの？

横を見ると、清水も首をかしげている。

俺同様、なんのことかわからないらしい。

「えっと、なんのこと？」

間違つた。何のことでしょうか？」

敬語、敬語、自分に言い聞かせる。

「？ きみ達はあそこにあつた村の住民ではないのか？」

「いえ。」

「じゃあ、旅人か何かか？」

「いえ。」

話がかみ合っていない

この世界に来てから、こういうことが多いな。」

「それよりもまずは、なぜ謝られたのか知りたいです。」

「ああ、そうだったな。」

あそこには村があつた。小さな、小さな村だ。

だが、北で『形持たぬ者』が現れてな。

そいつらはまず周辺の村を襲つた。

都市も襲つた。

わしは国を治めるものとしてこれ以上、被害を出すわけにはいけなかつた。

よつて、軍隊を編成し、討伐を始めた。

しかし、彼らの力は強力だった。わが軍は徐々に後退を続けた。

そこで最終防衛ラインとなつたのがあそこだ。

わしはそこにいた村民を都市に家を与え引越しを促した。

大半のものがそれに従つた。

村民の全てが避難した時、

旅人も、

商人も、

誰も危険な目に会わぬようこの区域への立ち入りを禁止した。

わしはフロトから君らが森にいたと聞き、
もしかしたら逃げ遅れたか。と思ったんだ。

よって謝った。

わしの力及ばぬゆえにきみらを危険な目に合わせてしまったんじ
やないかと思つたから。

王の話はそこで途切れた。

王は俺らを危ない目にあわせてしまったと思ひ込んでいる。

俺らが、立ち入り禁止区域にいたのは、この人のせいではない。

俺らは違う世界から来たのだ。

その到着点がたまたまあそこだったというだけ。
しかし、立ち入り禁止区域に人がいても、そのような発想はまず浮
かばない。

「王様、それは違います。私達は気付いたらあそこにいたんです。
俺がどう説明すればいいのか迷っていることを清水が説明をしてく
れた。

だが、そんなこと言っても誰も信じてはくれないだろう。
むしろ馬鹿じゃねえの？と思われくらいだ。

考えてもみてほしい。

自分の目の前にいきなり、私異世界からきました！。って言う人
が現れたでしょう。

はたして、それを信じるのは何人か・・・。
100人いても1人信じる人がいるかいらないか。
いたとしたら、その人は詐欺に要注意だ。

昨日までの俺なら絶対に信じない。
見てみる。

王様も首をかしげて、どうということだ？っていう顔してるぞ。

「だから、違う世界からきたんです。」

これ以上、場を余計に混乱させること言わないで・・・。
フォーローが見当たらない。

仮に嘘でもいいからリアリティのある説明をしようとするど、
あの森に住んでました。

王様がさつきみたいに謝る。

間違って入りました。

俺らが悪者みたいになる。

真実はどちらにも悪くないが、信じてもらえない。

嘘は信じてもらえるが双方どちらかが悪いということになる。

「よし、きみらの話。信じよう。」

信じちゃった。王様が長い考察の上で信じちゃった。

ここ数行の俺の考えたこと全部無駄じゃないか・・・。

「フロト。この者達の世話をフォーゲルとしてくれ。任せた。」

なんだかんだで保護者が決まっちゃった。

それよりも、同じ年が保護者って・・・。

まあ、俺らはこの世界については小学生以下の知識しかもっていな

い。
保護者は必要だろう。

そういう意味では、趣味とかが合うかもしれないから良い人選だ。

それに可愛いし。

ロリコンというわけではない！フロトは同い年だ！

心の中で宣言。見た目まんま幼女なのに……。

これ口に出したらまた泣かせてしまうだろうなあ。

いや純粹に命が無くなるかもしれない。

だって魔法使いだし……。爆発させてたし……。

『命大事に』だ！

……フォーゲルって誰？

フロトに案内されて皆内の一室に辿り着く。
ここが戦時中に使う部屋のようだ。

「おかえり。」

ドアが開くなり中から声が聞こえる。

「ただいま。父さん。」

「どうやらフロトの父親らしい。」

「紹介するわ。2人は真島修哉。清水綾。」

王の指示でこの2人の面倒を見ることになったけど大丈夫？

「問題ない。家族が増えるのはいいことじゃ。」

「ありがとう。父さん。」

どうでもいいけど敬語を使わないフロトをはじめて見た。
新鮮な感じがする。

フロトは続いて俺らのほうを向き、紹介をしてくれた。

「この人が私の父、フォォーグルです。」

フォォーグルとよばれた彼は白髪の老人だった。

切れ長の目。それであって優しさを感じさせる。口角は若干上がったいて、微笑んでいるようだ

俺たちの保護者……。

優しそうな人よかった……。ほっと胸をなでおろす。

フロトの話によると、彼はフロトの育ての親らしい。

なんでも、小さい時に両親は他界してしまったとか……。

気がつくともフォォーグルの手が目の前にあった。

握手か……。

俺はその手に自分の手を重ねる。

「よろしく。わしはフォォーグルだ。身分は平民。現在は軍の情報整理官を務めておる。」

軽い自己紹介を終わらせてから俺らは円卓を囲んで話を始めた。

「1つ質問ですが。真島さんと清水さんは本当に異世界からやってきたんですか？」

真っ先に聞いてきたのはフロトだった。

そういえば異世界から来たっていったのは王の前が初めてだな。

「異世界から来たのは本当だ。授業を受けながら桜を見てたらここに来た。」

「あたしもそんな感じよ。桜を見てたわ。あの授業退屈なんだもん。」

授業と桜。

これは共通点か？

フロトが疑りの目でこちらを見ている。

「疑っているのか？」

「イエ。ウタガツテイマセン。」

棒読み・・・思いつき疑っているな。

まあ、信じて言うほうが無理な相談なんだろうが・・・。服は全然違うもの着てるんだけどなあ。

俺ら制服だし・・・。

そのときポケットのごしに何かが脚に触れた。

ちよつとした重量。

ん？これは・・・。

それをポケットから取り出し全員に見せる。

「あんた、それ・・・。」

横で見えていた清水が驚いている。

直方体の物体。

「おう、紛れもない携帯電話だな。清水は持ってないのか？」

「校則違反だから。」

みんな普通に持ってきているんだが・・・。

さすが猫かぶりだ。

自分にとって都合が悪くなることはしないんだろう。

「電話はかけられないが、光るし、音出るし、科学が発達してないらしいこの世界では証明には十分だろ？」
そういうと俺はアラームを1分後にセットして机に置く。
フロトとフォーゲルは頭の上に『？』を浮かべている。
そりゃあ そうなるだろう。見たことも無い電子機器だからな。

1分後、

音楽と共に、朝です！朝です！と告げる電子音が部屋に響いた。

フロトとフォーゲルは最初こそ驚いていたが今は目を見開いて携帯電話を見ている。

「信じてくれたか？」

おそろおそろ尋ねる。これで信じてくれなかったら・・・もう信じてもらう術は無い。

「信じざるを得ません。」

2人が声を揃えて頷く。

ちよつとした達成感が心の奥から込み上げてくる。
ついに俺は信じさせてやったぞ。

どうでもいい達成感はおいとして、

「フォーゲルさん。あの黒い生き物は何ですか？フロトはよく知らないらしいんですけど・・・。」

ここに来るまでにこの質問はフロトにもしている。
しかし、魔法のことはわかっているのに、謎の生物のことはわからないらしい。

「あの生物ですか・・・。」

結論から言つと、いまだによくわかっていません。

ある日、大陸の北部で大量に出現したという報告だけです。

彼らの嫌なところはですね。その力とその量にあるのですよ。

地を人の倍の速さで進み、表皮は硬くほとんど剣が通らないんです。破壊本能のままに動くため、人と違い容赦なく相手を殺します。

1体に対して3人の屈強な戦士で挑んでやっと互角でしょう。

更に数に限りがありません。何体仕留めようとも、次から次へと沸いてきます。

北方には少し前まで大陸最強と謳われた軍事国家が存在していたのですが滅ぼされてしまいました。要因は先ほどいった反則なまでの強さです。多数精鋭とでもいいでしょうか。

また彼らは種族ごとの特定の形を持たないため、

『形持たぬ者』とよばれております。」

そこまで言っつてふつとフォーグルは顔を曇らせる。

そして重く、低い声で続けた

「過去にも『形持たぬ者』と人の間で行われた戦争があったんですよ。」

自分の居場所

「過去にも『形持たぬ者』と人の間で行われた戦争があったんですよ。」

フォーグルの言葉は過去現れた『形持たぬ者』がいままた現在、現れたことを意味している。

過去に出現して、この間まではいなかった。一体どうということだ？

フォーグルは立ち上がり室内の隅にある本棚へ行き、本を一冊とってきた。

それを俺たちのいる円卓の中心で開く。

フォーグルが言葉を続けた。

「過去・・・今からざっと3000年ほど前になりますか。形持たぬ者の出現が歴史書に出てくるのはそれからです。」

しかし、不思議なのですよ。その記述がされてから今まで、一度も形持たぬ者は歴史に出てこない。

わかりますか？

3000年もの間、形持たぬ者は何をしてきたのか。もしくはどんな状態にあったのか。

全くわからないのです。」

本の行を追いながらフォーグルは、説明をしている。

「その戦いの結末はどうなったんですか？」

思い切って尋ねてみる。すると信じられない答えが返ってきた。

「人が勝った。」

問題はその先・・・

「異世界からきた人間によって決着がついたのだ・・・」

その言葉を聞いた途端、俺は・・・瞬間的に鼓動が速くなるのを感じた。

過去にも俺と清水と同じ状況に立たされた人間がいる。

それだけで十分。

不安が体から抜けていく。

おそらく、王様もこのことを知っていたのだろう。だから俺らの説明を信じてくれた。

「その異世界から来た人は元の世界に帰ることができたのですか？」

「わからない。そこまでは記されていない。ただ、・・・こう書かれてはいる。」

異世界から来た者は4人。

男3人。

女1人。

男の1人は形持たぬ者との大戦後に処刑。

また1人は何者かに襲われて死亡。襲撃者は不明。

女は大戦により戦死。

残った1人の男はその風貌、戦いのスタイルから『炎獣の化身』と呼ばれた。

「4人の内、3人はわかるだろう・・・。
もう1人・・・炎獣の化身はどうなったのかわからない。」
フォーゲルが告げる。

4人の内、3人も死んでいる？
残った1人も不明・・・。

地球へ戻る方法はわからない・・・か。
せつかくてがかりが見つかったというのに・・・。
3人はこの世界で死んでたなんて・・・。

「終わった・・・。
終わった・・・。」

帰る方法はわからない。4人の内、3人も死んでしまっていた。
それはつまり、彼らは最後まで帰る方法を見つけないことができなかったのだらう。

形持たぬ者に勝つ力があつたとしても、地球に帰る方法はなかった。
チエツクメイト・・・だ。

これからどうすればいいんだらうか。
どっかで農業なり工業なり商業なりをして生きていこうか？
その場合、まずやり方を覚えるところから始まるのか。大変そうだな。

軍に入ってあの化け物と戦うか？

無理だな。俺にはそんな力は無い。
俺はどこにでもいる一般的な高校生だ。

俺がこれからの生活について考えを巡らせていると、
清水が椅子から立ち上がり言い放った。

「まだ、終わってない。

その残った1人についての情報を探せばいいじゃない。
この人たちはこの世界における私達の先輩なのよ！
諦めるのは、先輩の残したものをなにかしら探してからでしょ。」

「清水……。」

俺の言葉を最後に直後訪れる沈黙。

まっ先に沈黙を破ったのはフォーグルだった。

「清水さん。そのとおりだ。

この世界では知りたいことが身近なもので理解できない場合、旅に
出る。

わしも昔は、よく旅に出たものだよ。

君達も、旅出ってみるといい。

その結果、過去を繰り返すことになるかはわからない。

だが、何もしないよりはいいだろう。」

過去を繰り返すというのは俺らがこの世界で死ぬことを意味してい
るのだろう。

つまり、死ぬかもしれないけど、それしか戻ることのできる可能性
は無いということだ。

虎穴に入らずんば虎子を得ず。ということか。

しかし、炎獣の化身なる人が地球に戻れたとは限らない。
その人もどこかで死んでいるかもしれない。

・・・でも、帰れる可能性が1%でもあるのなら、

俺はそれに賭けてみたい！

「俺も賛成だ。どうせこの世界で俺らが生きていくのは難しい。戦争もあるしな。」

「君達2人は本当にそれでいいのか？

旅に出たとしたらどこで形持たぬ者に出会うかわからない。

出会ったとしたら、君達は自分で自分の命を守らなくてはいけない。
その覚悟はできているのかい？」

「フォーグルさん。

勿論、俺は死ぬのは怖いし絶対に嫌だ。

だけど、俺らがこうしている間にも地球では

家族が心配しているかもしれない。

友だちが心配しているかもしれない。

家族と友だちってさ。いつも一緒に話して、笑って、馬鹿なことして、

時には喧嘩にもなるけどさ・・・

それでも一緒にいたいって思うんだよ。

会えなくなると悲しいって思う。

あそこは、こんなにも居心地のいい場所だったんだ。

俺のいたい場所はここじゃない。

だから俺は探す。

自分の居場所へ帰るために。」

「あたしもおんなじ。地球に帰りたい。だから旅に出る。」

清水と意見が一致した。

そんな俺らを交互に見てフォーゲルは言う。

「そこまで帰りたいのなら、もう止めはしない。
だが、約束してほしい。」

『絶対に死なない』と……。

真島君が言ったとおり、私も家族と会えなくなるのは悲しいから。

ん？不思議そうな顔をしてるね。

きみらは、紛れも無く私の家族だよ。

国王陛下にきみらの世話を任されたときからね。

だから、会えなくなるのは悲しい。

それとフロト。

きみも一緒に行きなさい。そして真島君達を守りなさい。

大丈夫、軍にはわしから話しておく。」

「わかりました。2人についていきます。」

フロトも一緒にきてくれるのか。

正直、不安がかなり消えた。半減などというものではない。

80%くらいも消えた。

だって、爆発させる魔法使えるからな。

「さて、旅立つきみ達に饞別とっては難だけど2つプレゼントを
しようじゃないか。」

そういうとフォーグルは部屋にあった2つの袋を俺らに1つずつ渡してきた。

「開けてみなさい。今のきみたちに必要なものが入っている。」

指示に従い袋を開けると中には、

茶色い皮製の鎧と短い剣が入っていた。

鎧はかなり使い古されているようで、いたるところが傷ついている。剣はいたるところが刃こぼれしていたが、今にも折れそうというほどではない。

清水の袋にもおなじ物が入っている。

「性能は低いが無いよりはましだろう。もって行きなさい。」

本当は軍の使う武防具をあげたいのだが、今は前線でも武防具が不足しているんだ。

だから私の一存で渡すことはできない。許してくれ。」

「謝らないでください。これをもらえただけでもとても心強いですよ。」

お世辞ではなく本当に心強い。

素手と剣なら剣のほうが絶対にましだし、鎧も制服を着て戦うよりはよっぽどましだろう

「そう言ってくれとありがたい。

さてもう一つのプレゼントだが・・・ついてきなさい。」

そう言うとフォーグルは部屋を出て歩き出す。

俺、清水、フロトはただそれを追う。

やがてフォーグルは一つのドアの前で立ち止まった。

自分の居場所（後書き）

正直、誰も読んでくれないだろうなあ、と思っていたのですがその予想は外れました。

想像以上の人が読んで下さっているようです。まあ初期予想が1桁だろうなあでしたし・・・。

読んでくださっている方々、このような小説に時間をとってくださりありがとうございます。

感想、評価してくれるとありがたいです。

旅立ち

一体どうしてこうなった……。炎獣の化身を探すなら、彼がかつて所属していた国へ行ってみるといい。

とのフォーゲルの言葉を聞き、咎を発つてから3日。森の中に俺たちはいた。

一見、和気藹々としている3人だが、よく見ると俺だけテンションが低い。

現在、俺は皮製の鎧に身を包み、腰にフォーゲルから貰った剣を2本さしている。

片方は当然、俺が貰ったもの。もう片方は元清水の持ち物だ。

なぜ清水の剣を俺が持っているのか、何故俺のテンションがここまで低いのか、というところ……

3日前、この世界に来た日にさかのぼる。

もう1つのプレゼントとしてフォーゲルが用意してくれたものは、魔法適正の検査だった。

つまりは、あなたには、属性の才能がありますよー。みたいな事を判断するらしい。

この検査を受けるには多額の費用が必要らしいが、それをフォーゲルが全額払ってくれたというわけだ。

ここでふと心配になり、この世界で彼に会ってから1時間くらいしか経過していないのに、こんなにも世話になつていいのだろうか？ということを書いてみたところ、

「別に構わない。炎獣の化身について私も興味があるからね。」
とのことらしい。

さて肝心な適正検査だが、皮膚に検査用の粉を溶かした液体をたらし、その場所を少し引つ掻く。数分後に皮膚の反応を見る。というものだった。

アレルギー検査に似ているだろう。

さて、数分後に検査の結果がでるといっわけでわくわくしながら待っている、担当の人が来ているいろと説明をしてくれた。

説明の内容は、

- ・ 使い物になる、ならないを考えなければ、誰でも何かしらの魔法の才能を持っている。
- ・ 実戦で使えるような才能が見つければ、魔力を高める薬を飲む。これで初めて魔法はつかえる。またその場合、属性に対応した杖を渡す。
- ・ 使い物にならない才能でも薬を飲めば、脆弱だが魔法を使える。ということだった。

当然、検査結果はとても楽しみだ。

地球では絶対に使えないと思っていたものをこの世界では使えるのだから。

魔法って使う時どんな感覚なのだろうか？俺はどんな魔法の才能があるのだろうか？

といったことを考えていると、ドキドキが止まらない。

さて、検査結果だが、先に呼ばれて行った清水が「やったー」と大きな声で叫んでいたところを見ると、なにかしら才能があったのだらう。

学業優秀、才色兼備、それに魔法も使えるならば、清水はもう敵無しだらう。

俺はどうだ？とよけい楽しみになる。

「あたし、ランク7の雷の才能あるんだって！すごいでしょ。」
出てきた清水がなにやら胸を張って自慢している。

「ランクってなによ？」

「ああ、なんか魔法の才能の大きさ？とかそんな感じ。

聞いた話だとフロトは炎9あるらしいわ。」

「ランクはどっからどこまであるんだ？」

「0から10までだって言ってたけど……。」

「そうか。」

魔法の才能にはランクがつけられているのか。それは知らなかった。それにしてもフロトは9ってすごいな。爆発とかはそれによる芸当か？

そんなことを考えていると……

「修哉さん。」

と呼ばれたので返事をし、歩いていく。

さあ、俺にはどんな才能があったのだ？

「真島修哉さん。でしたね。私は今回の検査を担当させていただく……。」

細かい説明はこれの際どうだっという。

とつとつと結果を教えてください。

「さて、検査の結果ですが・・・いまだに信じられません。あなたはとても珍しい。」

お？

そんなに珍しい才能が俺の中に!?

一体どんな才能だ？

俺は今にも立ち上がって喜びたい衝動にかられながらも、それを必死に抑える。

まだだ。まだ喜んだらだめだ。

担当者が口からはつきりというまで。喜んだらダメだ。

「あなたには・・・」

あなたには？

「あなたには魔法の才能がまるで無かった。」

「やったーっ!・・・え？」

「本当に珍しいんですよ。魔法の才能が全く無い人間なんて・・・」

心の中で期待と希望と今にもあふれ出しそうだった喜びが、一瞬にしてしぼんでいくのを感じた・・・。

え？何？そっちの珍しい？

思わず『理不尽だ!』と叫びたかったが、生まれ持った才能はどうしようもない。

この場をみていた人がいれば、10分前の俺からは考えられない落ち込み具合だったと全員が言うだろう。

その後、清水は魔法を使えるようになるという謎の薬を飲み、魔法についての講義を受けに行った。
俺は一人でポツンとしているわけにもいかず、清水についていく。

講義が始まって早2時間。

現在、俺はすでに集中力の限界に達している。
受けてるけど、俺は魔法使えないんだよなあ。

どうあがいてもここでの知識は役に立たない。そう思うと自然と集中が削がれる。

そして、自然とため息も漏れる。

ふと、横に目をやってみた。

視線の先では清水が講義を受けている。

その顔は俺と真逆で真剣そのものだ。

そつえば、清水って学校ではねこかぶってたからな。

集中するのはお手の物なんだろう。

魔法に興味があるってのも一理あるかもしれないが……。

講義が終わった後、清水は杖を貰うらしく質問をされていた。

「雷属性の杖ですので宝玉には黄色いものを使用します。これで1目で魔法使いの属性がわかるのです。杖の先端の宝玉はどのような形にしますか？球とデルタ8面体がありますが……。」

デルタ8面体？なにそれ？

「デルタ8面体って何？」

さすがの清水でもわからなかったようだ。

そつえばフロトの杖は赤い球体だったよな。

炎は赤いのか。
んで、雷は黄色。

どうやらそこらへんの価値観は地球と同じらしい。

「全ての面が正三角形でできた双四角錐です。」
質問の主は説明を続けている。

しかし、

うん。これでもわからない。とがってそんなことしかわからない。
やばいな俺。どうした俺。負けるな俺……。
いや、負けるも何も戦ってないけどね……。

よしここは一つ。迷っているようだし清水に提案してみよう。

「性格が丸くなるように球にすれ……」バキッ！

ば？まで言えなかった。強烈なアッパーが直撃したのだ。
痛い。ほんと痛い。

「あんたは黙ってる。」

「ひゃい。わかりました。」

下顎をさすりながら俺は答える。

今後一切、清水をからかわないようにしよう。なにされるかわか
らん。

命大事にだ。

ん？ 前にもこんなことあったよな。

「デルタ8面体でお願い。」

結局清水は球体を選んでくれなかった。

清水よ。ほんとにいいのか。性格丸くしなくて……。

数分後、清水の杖が持ってこられた。

清水の身長より長い棒の先端に輝くデルタなんか形。

その杖を清水がつけとる。

重量を確かめるようにふっている。先端が尖っているためとても危ない。

やがて、重量を確かめ終わったのか、

「これ、もう使わないから、あんたにあげるわ。」

そういつて清水が渡してきたのはフォーグルに貰った剣だった。

というわけだ。

わかってくれただろうか。

俺のテンションが著しく低いのは魔法が使えなかったショックによるものが大きい。

しかも、そのあと剣が1本増え、片手剣使いから双剣使いに予想だにしなかった、不名誉のランクアップをってしまったし……。

もう諦めるよ。と頭ではわかっている。わかっているけど心がわかってくれない。

例えば、おいしいと評判の店のプリンがあったとしよう。

いつか食べようっ！とそれを冷蔵庫の中に置いておく。

そしていざ食べようと思ったら、なんと目の前で幼稚園児の弟の胃袋に入ってしまった。

その時、どう思うだろうか？

園児を責めることはできない。けど楽しみにしていたプリンを食べられてしまった。

その気持ちがある今の俺の気持ちだ。

魔法が使えるととても楽しみにしていたのに、目の前の清水はそれを手に入れたのに、俺は手に入らない。

学業優秀、才色兼備、ならばもう魔法なんていらないじゃないか。神様はなにを基準に才能を割り振っているのだろう・・・？嫉妬とまではいかないが、やはり羨ましい。

「真島さん。どうしたのですか？ 皆を出発してから元気がありませんよ。お体を壊されたのですか？」

「なんでもない。ただちよっと人生ってなんなんだろうな。って考えてただけだ。」

「それは大丈夫と言っていいんでしょうか？ 普通ならそんなこと考えませんよ。」

「具体的に言うとな清水が俺のプリンを食べたんだ。」

「プリン？ 何の話ですか？」

「神様の理不尽を呪っていたんだ。」

「最初より大丈夫じゃなくなった気がします・・・。」

フロトが低い位置から赤い2つの目で見上げてくる。

なんだかんだいってもフロトだけは、俺の心も変化をわかってくれる唯一の味方に思えてならない。

「ほっとけばいいのよ。いずれ復活するから。」
と清水。

原因はお前だよお！ と言いたいが、清水に非があるわけでもないため、言わずにおいた。

「しばらく復活は難しい・・・かもしれない。」

「じゃあ、それ、気のせいだわ。」

「俺が落ち込んでいるのに、それはあまりにも酷だと思っんですが

!？」

「いや、常識、常識。」

「何の!？」

「落ち込んでいる、真島修哉をみたら全力でいじめること。」

「そんな常識あつてたまるか！ 謝れ！ 俺と全国の真島修哉に謝れ！」

「じゃあ、ごめんなさい。」

お、珍しいこともあるものだ。清水が謝るなん・・・

「全国の真島修哉さん。この場を借りて謝罪を申し上げます。尚、あたしの隣にいる人は除く。」

「俺にも謝れよ！除くってなんだよ除くって。」

「まあ、まあ、2人ともそのくらいにしておいたほうが・・・。」
「遮るなフロト。俺はこいつと決着をつけないとだめなんだ！」

俺はそういうと腰の古い剣を2本とも抜き放つ。

それに応じて清水も先端のどがった杖を俺に向けている。

一触即発だ。

とまあ、旅立ってから3日、険悪な俺と清水。それをなだめるフロトといった構図が完成してしまっていた。

まだまだ、旅立ったばかりだからなんとかなるよな？

ほんとにこの関係、何とかなっしてほしい。心の底から切に思う。

・・・・・・なんとかなる・・・よな？

熊

ふと周りを見渡すと、
足元には生い茂った草。道らしき道はない。横には無数の木がある。
というより俺の真横にも木がある。目の前にも木がある。

さて、

「なあ。ほんとに、この道であってるのか？」

「わかりません。」「わからない。」「

これは・・・俗に言う遭難というやつでは？

幾度と無くその考えが頭に浮かぶ。

そもそも、俺たちは、炎獣の化身が所属していたという国へ向か
っているはずだ。

その国は南に位置するため、フロトやフォーグルの所属国を通るこ
とになる。

今はそこへ向かう途中。

当然、フロトもいるため、まさか迷いはしないだろうと思っていた
が、そのまさかが起きてしまった。

さあて、何故こうなったのか経緯をまとめてみようか。

俺らは整備された『道』を歩いていたはずだ。その時、突然目の前
にウサギらしきかわいらしい生き物が現れた。清水が意外にもそれ
に反応。その生き物を追いかけていつてしまった。俺らは、放つて
おくわけにもいかず、清水を追いかけた。

俺はその時、道はフロトが覚えておくだろう。と思い、全力で追っ
ことに集中したのだが・・・、
わかるだろう？

運動神経抜群の清水が相手だ。やっと捕まえた頃には『ここどこ？』である。

個人的には、小柄なフロトがよく俺と清水についてこれたな、と思うところだが今は全く関係ないため、省かせてもらう。

さて、ここで誤算が発覚する。フロトもかわいいものには目が無いというではないか。

歩いていた道に戻る道筋はフロトが頼りだったのだが、全然覚えていないらしい。

360°あたりを見渡しても変わり映えしない草木があるだけ。

立派な遭難の出来上がりである。

というか遭難に立派も何もないだろう。

「どうにかして、道に出ることはできないか？」

「地図も無く、方角もわからない今、それは難しいでしょうね。」

「今日中に出れそうか？」

「運と根気によるんじゃないでしょうか？」

ここでの根気は歩き続けることを指すのだろうか？

「どうするかなあ。」

「いずれ、なんとかなるわよ。」

清水にはもう少し真剣になってほしい。ウサギを真っ先に追いかけていったんだからな。

木、木、木、さっきから風景が変わらない。

ん？ 木？

「そつだ！木の年輪とかでなんとかならないのか？幅が広いほうが

南とか・・・。」

我ながらこのアイデアは素晴らしい。よくやった俺。ナイスだ俺。すごいぞ俺。

「あ、それなら無理。」

「俺のアイデア一刀両断するのやめてくれる!? 無理ならなんで無理なのか説明してくれよ。」

折角思いついたアイデアなんだ。もう少し考えてくれ。

「あんだ、周りみてみなさいよ。」

周り?折れた木なら沢山あるけど・・・。

「その顔じゃわかって無いみたいね・・・。

・・・いい?ここは割と傾斜が多いの。

その傾斜に対して木は真上に立っている。

木だつて馬鹿じゃないのよ。当然倒れないように、斜面の方向は頑丈に育つ。

そしたらその方向の年輪の幅は広がるわ。

斜面が東に向かつて下がっているなら東の方角の年輪の幅は広くなるってこと。

それに、年輪を見られるほど滑らかな切り口の木はないでしょ。」

「まいりましたーっ。」

清水の言っていることは多分正しいのだろう。

確かに、斜面により年輪の幅は変わるかもしれない。

しかもほとんどの木はへし折れている。

チェーンソーなどで切ったような木はない。

さすが頭がいいだけのことはある。

俺もそこらへんは認めているし、否定のしようもない事実だ。

しつこいが、性格をどうにかしてもらえないだろうか。今回は棘が少なかったけど・・・。

攻撃的な上に魔法が使えるんだったら、俺いつか殺されるかもしれない……。

一体いつになったら、命だいじに、から抜け出せるのだろうか。

といった、この世界に来てから考えるの何回目だよ？とつつこみたくなるような思考をめぐらせていると、ふと、視界に黒いものが映った。

それも俺らの姿を確認したのかこっちに寄ってくる。

どうやら最初は遠くにいたらしく、近づいてくるにつれ大きく見えるようになった。

見つけたときはウサギ程度の大きさ。でも今は違う。

俺たちの前に立つそれは2m50cmはあるつかという熊だった。つて熊！？

遠近法ってこんなにも変わるんだあ。

「やはり出てきましたか……。」

横ではフロトが杖を構え今にも戦おうとしている。

「ここら辺の森には熊がいると言われていましたが、まさかほんとに戦うことになるとは……。」

フロトよ……知ってるんだったら最初っから教えてくれよ……。

「逃げることはできる？」

「できません。ここ周辺の熊は脚が速いうえに跳躍力もすごいんですから。背中見せたとたんに、やられますよ。」

遭難、後ろに女の子2人、目の前には熊、俺の腰には剣。

何この少年漫画的な展開は！？

これが少年漫画か何かだったら、か弱い女の子2人を守るため俺は熊に立ち向かい、死闘の末、見事撃退。好感度うなぎ上り！……

もしかしたらその後、膝枕で介抱をしてもらえるかもしれない！そして「真島君、見直したわ。」チュツ・・・的な実に美味しい展開になるのかもしれない。

・・・しかし、現実はそのなにあまくない。

後ろの守るべき、か弱い女の子2人が、実は俺なんかよりはるかに強いし、

死闘も何も、熊から見れば、俺はLV1でも一撃で倒せるような、モブキャラ中のモブキャラだろうし、

俺が大怪我を負ったところで、介抱なんてしてくれないだろう。(フロトには可能性あるかも)

俺はなんにもしなくても大丈夫なんじゃないか？

その考えが頭をよぎる。が直後、清水から俺の後頭部へ蹴りが飛んでくる。俺はその衝撃に耐え切れず熊の前へ飛び出した。

「マシマクン、ワタシキミノコト、ワスレナイ。」

「おい！人を熊の前に押し出しておいてなんだその台詞。俺死ぬこと確定じゃねーか。しかもすっげー棒読みだし！」

涙目まで作ってやがる。演技が細かいのはいいかとだが(いいことなのか?)その前に迷い無く人を熊の前に押し出すのをやめてほしかった。

「フロト。ここで俺が戦うのは得策じゃない気がするんだが・・・」

「いいえ、得策です。」

「ついに俺の味方がいなくなった!？」

フロトに見捨てられたら俺ここでどうやって生きていけばいいんだろうか。

「勘違いしないで下さい。魔法使うまでに時間がかかるのでそれまでの時間稼ぎです。」

ああなるほど。でも今の俺にはそれすらも困難だと気付いてくれれば嬉しかった。

「フロト、魔法あたしに使わせて。」

清水の言葉に、瞬間、俺とフロトは耳を疑った。

「遊びじゃないんです。もう少し実戦経験を積んでからにしてください。」

「だから、積むために戦うのよ。炎と違って雷なら殺さないこともできるしね。」

清水がどんな魔法を使っても一向に構わないが、その前に1つ言わせてくれ。

「その優しさを俺に分ける気はないのかよお！」

「いや、だってあんたどうでもいいし。」

即答だった。これ以上無いくらいの即答だった。

「俺は今まで清水のことを勘違いしていたようだ。地球から来た者同士、いざとなったら助けしてくれると思ってた。でもそれは間違っていた。清水は自分のためなら・・・」

「どうでもいいけど熊のパンチ飛んでくるわよ。」
「え？と思い、振り向くと、目の前に黒いものが迫ってくる。俺はどこから絞り出したのかわからない瞬発力で、持ってた剣を体の前に持ってきた。」

が、ガキンという金属音と共に地面に落ちる刀身。

熊の攻撃はそれで止まっているが、剣は・・・

フォーゲルさん。ごめんなさい。あなたに貰った剣、たった今1本折れました・・・。

いくら刃こぼれもある剣だからとはいえ、それを一撃で折る熊の怪力を目の当たりにして、俺は思った。

清水とフロト。俺には時間稼ぎなど無理だあ！
その時、

「よし、真島、あんた、熊の前から避けて。」
声を聞いて俺は地面を蹴り横へ転がる。それにより清水の真正面には熊しか存在しない状況が出来上がった。

どうやって逃げようかと迷っている暇は無い。清水のことだ、なに
かしら魔法でも撃つんだろう。それは俺がいよつといまいと関係な
く使用するはず。つまり、逃げないと俺も巻き込まれる。
と言うのは避けた後に考えた、微妙にかっこいい言い分（かっこい
いか？）だが、まあ間違いではないだろう。

「えーっと、魔法の軌道を頭の中でイメージして・・・」
清水が杖を熊に向ける。

「最大の力でいっけえ！」
清水の大声が響く。

つておい。熊を殺さないために魔法を使うことにしたんじゃないの
かよ。

と思うが、時すでに遅し。

杖の先端から飛び出て、熊と杖を一直線に繋ぐ電気。
バチツという感電音。直後にドサッと音を立て地面に倒れる熊。
動物愛護団体が見たら間違いなく文句をつけてくるだろう。
安心してくれ。俺が代わりに言うておくことにしよう。

「殺さないために魔法つかったんじゃないのか？なのに、なにが最
大の力だ。」

確かにこうしないと、こっちが全滅していた。しかし他にもやり
方はあっただろう。

「あんだ。何言ってるの？熊生きてるじゃない。え？」

確かに熊は死んでいなかった。気絶していた、というべきか。かすかに動いている。

「清水、最大の力つて言っただけじゃなかったか？」

「ええ、言っただけよ。」

「それ嘘だったのか・・・」

「いいえ、本当よ。」

いやいや、それはない。ランク8（どれくらいか知らないが上から3番目）もある魔法使いの魔法がこんなに貧弱で言い訳が無い。いや熊気絶させたらそれはすごいことだけでも。

「ランク8じゃないのかよ。」

「ランク8よ。」

「全力が弱すぎないか？」

「だって初めて使ったもん。」

そっか。そういえば初めて使ったのか。納得。だから全力でも気絶か。

つまり今の清水は、攻撃的なスタンガンだな。相変わらず恐ろしい。

「話すのは後でもいいですからまずここから離れましょう。」
とフロト。

全くだ。こんなところとつとと離れよう。」

「で、どっち行くんだ？」

「・・・」「・・・」

忘れてたけど、只今、俺たち絶賛遭難中

「適当にあるところか。」

ということになり、暫く歩く。どれくらい歩いたかなんて知るも

のか。携帯のバッテリーは抜いてある。いつ何時、俺たちが地球人ということに疑いを持つ人が現れるとも限らないからな。

やがて、

目の前に見えてきたのは、

さつき戦った熊だった。

「俺たち縁あるんだな。仲良くしようか。」

と伝えられるものなら伝えたい。誰か熊語を教えてください。

その熊は、俺の横を素通りし、

清水の前で立ち止まり、

地に伏した。

え？何が起こってるの？いつの間に関手なずけたの？

清水はキョトンとしている。

フロトは呆然としている。

俺は混乱してパニックに陥っている。

俺、落ち着きないな、と思ったのは数秒後のことである。

やがて熊は立ち上がり（といっても4足歩行だが）、のそのそと歩き出した。

俺らは何が起こっているのかもわからないまま、ただ熊についていた。

古い武防具に身を包んだ男、スタンガン少女、全身紅の幼女、大きな怪力熊。

ある種の、特殊なチームになってきている。

どつでもいいが、どつも俺だけ弱そうだな。

熊（後書き）

正月があつたためずっと寝てました。
そのため、更新が遅れてしまい申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6614z/>

異世界への迷人

2012年1月6日21時36分発行